政令指定都市・区制移行30周年

東北における仙台のあり方と地域づくりシンポジウム

◎市制施行130周年　◎政令指定都市・区制移行30周年記念

報告書

日時　令和元年10月5日（土）
13:15～16:10

会場　せんだいメディアテーク
1階オープンスクエア（仙台市青葉区春日町2-1）

主催　仙台市
まちづくり政策局政策企画課

東北における仙台のあり方と地域づくりシンポジウムとは

仙台市は令和元年に市制施行130周年、政令指定都市・区制移行30周年を迎えました。これを記念して、東北における仙台のこれからを考えるシンポジウムを開催しました。
シンポジウムでは、急激な人口減少や超高齢化社会、東京圏への一極集中が全国的な課題となっている中で、東北における唯一の政令指定都市として仙台が果たすべき役割を考えました。また、仙台でさまざまな活動に取り組んでいる方々の事例紹介を交え、大都市ならではの地域づくりについても話し合いました。
事前にチラシとポスター、ホームページ等にて参加を募り、当日は109名の方々にご参加いただきました。

プログラム

- 開演・市長挨拶
- 基調講演
- パネルディスカッション
- 終 演

基調講演

仙台市のポジションから考えるアクション！

講演者

株式会社 VISIT東北
代表取締役
齊藤　良太 氏

仙台市出身。平成28年に起業し、平成29年に一般社団法人宮城インバウンドDMOを丸森町に設立。丸森町を重要拠点と位置付け、まちの活性化を農業や観光などで後押ししている。今年7月には、本社機能を仙台市から丸森町に移転。丸森町から東北、日本、そして海外へと情報発信を行うことで、地域の産業振興・観光事業推進に取り組んでいる。

●齊藤氏はパネルディスカッションのパネリストとしてもご参加いただきました。

ファシリテーター

特定非営利活動法人
まちづくり政策フォーラム 理事

足立 千佳子 氏

（特非）まちづくり政策フォーラムの事務局長、常務理事を経て、現在は理事。まちづくりワークショップファシリテーターとして全国各地の住民主体のまちづくりを牽引する。仙台では、駅東エリアの活性化について審議委員、NPOの立場から携わり、平成26年には仙台駅東エリアマネジメント協議会の設立に携わる。また同時に、東日本大震災後は登米市を拠点とし被災地支援に取り組み、（特非）とめタウンネットのプロジェクトスタッフとして女性支援、地域の居場所づくり、グリーンツーリズムの実践をすすめている。

パネリスト

東北大学大学院
法学研究科 教授

飯島　淳子 氏

平成15年より、東北大学大学院法学研究科・法学部にて、行政法・地方自治法を担当。現場重視の政策提言を目指す公共政策ワークショップを担当し、仙台市の次期総合計画の策定作業と並走しながら、学生ならではの視点で調査研究を進めている。著書・論文として、「市民のための行政法、公務員にとっての行政法」（有斐閣）、「地域運営組織の法人化」（ガバナンス189号）等がある。

生出地区まちづくり委員会
副委員長

太田　孝 氏

平成26年3月に地区のまちづくりのあり方や活性化を検討するため連合町内会の諮問機関として設置された生出地区まちづくり委員会の副委員長を務める。「まずは活動してみよう！」を合言葉に、「農業塾」、「自然歴史文化塾」、「イベント塾」といった塾形式での活動のほか、東北工業大学と連携したまちづくり活動に取り組んでいる。

公益財団法人
せんだい男女共同参画財団
理事長

木須 八重子 氏

仙台市役所に入庁し、生涯学習、男女共同参画、総合計画、市民協働、環境などを担当。平成22年4月に宮城野区長に就任し、東日本大震災発生時は、宮城野区災害対策本部長として、被災地の初動時対応から、仮設住宅移転、集団移転に向けたコミュニティ形成などに取り組んだ。仙台市役所退職後、平成25年5月より現職。

せんだい未来会議
代表

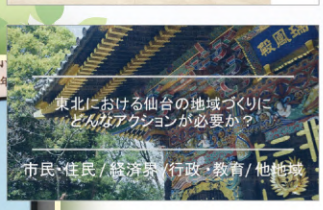
佐藤　柊 氏

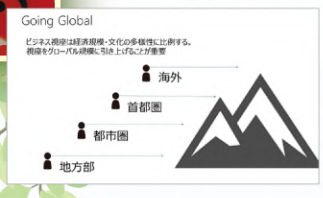
仙台を中心にまちづくりに取り組む学生団体せんだい未来会議の代表を務める。10～30代の市民らに街頭インタビューなどを重ねて意見を集約し、市が抱えるさまざまな課題についての具体的な施策（解決策）を「仙台若者ビジョン提言書」として取りまとめ、仙台市の郡市長や市議会各会派に提出するなどの活動を行っている。

基調講演

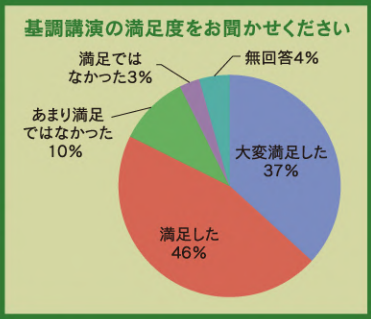
仙台市のポジションから考えるアクション！

仙台生まれ仙台育ち、海外に留学をした後に仙台・丸森で会社経営を行う齊藤氏が登壇。現在の仙台市のポジションを踏まえながら、個人、経済、行政・教育、地方から見た仙台という4つの観点から、「地元を愛する」、「視座を上げる」など、いま求められているアクションについてお話しいただきました。





参加した市民の皆様からのアンケートより



- ➡地元にこだわりながら、海外経験・震災経験を踏まえて家族・子どもに背中を見せるとの思いでのUターン起業、地域を活性化させるActiveなビジネス展開に感心するとともに、益々の期待を感じた。
- ➡地元愛が大事である一方、他の視座を持つことが大事ということに共感。二番煎じに陥らない、多層的で独創的なアイディアの実践をされて、ビジネスとして成立させていることに驚きを感じた。
- ➡グローバル、先進性、多様性、突き抜ける勇気という言葉が印象に残った。
- ➡地域を活かす方法がたくさんあることを学べた。人が少ない地方でも方法を工夫することで新しい地域を作れる可能性を感じることが出来た。
- ➡今後の仙台を考える場合、市民の立場で何をkeyに考えていくか、その視点が見えたように思えた。多様性というkeywordは市民1人1人が新たに認識することがいかに大切か方向が少し見えた。
- ➡「視座を上げる」という言葉が新たな発想につながるように感じられ、自分に何ができるのか考えるヒントになりそうに思えた。全体的にとてもわかりやすい語り口でよかった。

視座を切り替えることで「仙台」に住む我々が何をするべきか

仙台・丸森で起業して世界とつながる

仙台生まれ、仙台育ち。高校までを仙台ですごした後、アメリカの大学へ4年間の留学ののちIT企業・外資系企業にて勤務。順風満帆な日々を送る中、平成23年3月11日、東日本大震災にて被災。東京の会社へ戻れず5日間ほど石巻で過ごし、その後も被災地へ戻りボランティアを行いました。その経験のなかで自分が本当にしたいことは何なのかということに悩み、仙台に戻り起業。今は、東北地方のインバウンド活性化のために活動する会社の代表として、メディアを立ち上げ、ウェブで世界への発信をしていくという活動や、外国の企業との業務提携等を行っています。

個人が地元を愛するアクション！

大前提として、仙台、宮城、東北、自分の地元を愛せていますか。自分の生まれ育った地域を愛していなければ、地域づくりに興味関心は湧きません。仙台は転入転出が多い地域ではありますが、住むと地元愛が生まれてくるという話もあります。そんな地元愛をもって語れるかということが、地域づくりや地方創生、地元というところにおいて必要な要素と考えます。自分の愛する仙台。それは何なのかを語れることをアクションにしてみては、という提案です。

経済の視座を上げるアクション！

経済という観点で考えると、グローバルに、先進的に、多様性を求めるべきと考えます。東北地方で最もグローバルであり、経済活動の中心地の仙台。このポジションを最大限活用して視座を上げることが重要です。海外から見るグローバル視座、東京から見る首都圏視座、仙台から見る都市圏視座、丸森から見る地方視座。それぞれの視座から物事を見て、考えることが重要だと考えます。高い視座に立ち物事を考えることで、大きなチャンスを見逃さないことが出来ます。逆に、視座を下げることで、地方で起こっていることを知る・目を向けることも重要です。

行政・教育から考えるアクション！

行政は、本質的なサポートに終始徹底すべきと思っています。仙台市は地元企業を集中的に支援しようという動きに入っていて、その活動は素晴らしいと思います。そこで、地域の起業家同士が集まる団体等と手を組んで、官が民をうまく利活用するというアクションも面白いのではないかと思います。また、教育面では経済面でも触れたグローバル視点に関連して、多様性を学ぶという意味で最大の武器となるのは「教育のグローバル化」と思っているので、ここをしっかりと考えることが出来るのは行政だけですので、よりよい施策を行政に行ってほしいと考えています。

地方から見た仙台

仙台は東北6県の唯一の政令指定都市で、いわばリーダー自治体です。リーダー自治体らしく、一番前を突っ切る仙台市を地方都市は追随する、もしくは利用するという形で物事を考えればよい、そういうポジションかと思います。仙台市の人も、丸森の人も、東京の人も、視座というのは臨機応変に上下の切り替えが必要で、地方にいても視座としては一番高いところを見たいですし、仙台の人は逆に下を見るべきです。自分たちがいる場所だけではなく、それぞれの場所がどういう状況なのかということを意識すると良いのかなと思っています。

仙台市に求められるアクション！

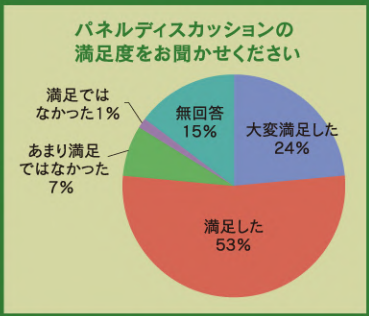
仙台市は、アドバンテージの塊です。視座を上げる、これは大事です。そして、視座を下げる、地方を知る、これも大事です。個人としても、会社としても、行政としても、地方創生に取り組む東北の筆頭リーダーです。その筆頭リーダーの皆さんが個人であっても、会社であっても、行政単位であっても、牽引していくというアクションが今求められているのだと考えています。

パネルディスカッション

東北における仙台のあり方
仙台での地域づくり

東北における仙台のあり方という視点からは、人口、市場、経済など集約していくような大都市制度のあり方や、東北全体の共存共栄のために仙台が期待されている役割について話し合いました。
また仙台における地域づくりという視点では、仙台で暮らす住民として、仙台に暮らすメリットや仙台だからこそできる取り組み、仙台だからこそ求められる地域づくりについて考えました。

参加した市民の皆様からのアンケートより



- ➡理論と実務は大きく異なり、今後の仙台には実務、Actionが大切だと思った。そのためには、行政や市民がフラットな立場になるよう行動に移したい。
- ➡「仙台に来ると視野が東京に向く」にうなずくばかり。同級生で仙台に就職した人は公務員を除くとゼロに近い。私は仙台生まれなので、さみしい。東北大生は東北出身が多いので「東北大生向けに地元企業がアプローチすること」も有意義だと思う。
- ➡まちづくりは行政だけで行うものではないし、このような様々な意見を持った方たちが同じ話し合いの場でフラットにまちづくりの方向性を決めていければよい。
- ➡東北における仙台のあり方について、それぞれの立場から具体的な事例、定義、課題を聞きたかった。地域づくりで参考になることは多くあった。東北における仙台のあり方と地域づくりの関係性の話が欲しかった。
- ➡戻ってきたくなる、戻ってこられる地域にする、楽しいと感じてもらうことが大事だということに共感できた。他のまちや東京をみる経験は大事で外にでることをただ否定するものではないと思うので、戻ってきた人、進学や仕事で仙台に来た人が住みやすいまちになることが大切だと感じた。
- ➡行政の力と市民の力をうまくmixさせることがpoint。

東北における仙台のあり方について

それぞれの方に自分の活動の中から見えてくる東北における仙台のあり方についてお話いただきました。

初めに飯島氏から、仙台市は東北地方の中で人口のダム機能が求められているがそれは現状果たせておらず東京に人口が流れてしまっていることについて説明がありました。また、政令指定都市や中核市などが中心都市となって周辺市町村と圏域を形成する「連携中枢都市圏」について広島県福山市の事例を挙げながら現状をご紹介いただきました。

それを受けて齊藤氏から、飯島氏が紹介した制度も含め、新しい制度に乗っかって事業を行う中で、二番煎じにならないよう肉付けを行うことでほかの地方より一つ飛び出ることができるのではないか。それをできるのは東北地方で一番パワーを持っている仙台市であり、そのパワーを正しい方向へ導く必要があるとのお話がありました。

佐藤氏からは、学生の視点から見ると、仙台は就職先の選択肢が、東京と比べると限られているため、若者が東京へ行ってしまうのではないかとの意見がありました。福岡市の若者への起業・スタートアップ支援を紹介しつつ、仙台が成長していくための武器は何なのか、他の自治体とどう差別化していくのかを考えていく必要があるとのお話がありました。

太田氏からは、まちづくりは地域との連携無しでは成り立たず、いろいろな方々との連携で初めて大きな流れになる。それを行うのに必要なのは地元愛であり、地域の人が楽しみながらやれることでその地域の課題を解決できるというお話がありました。

木須氏から、仙台市役所でも働いていた経験から、常に宮城県内、東北全体を考えて仕事をしなさいと言われていたこと、一方では、他の政令指定都市の事例を気にしすぎて、失敗しない優等生にもなりがちだったというお話がありました。また、東日本大震災の被災・復興の過程で、職員が市民の地元への想いを受け止め一緒に考えることができたのは市民協働の一つの形と考えるとの意見が出されました。

最後に足立氏からは、東北から仙台に来る人の中には、さらに東京へ行ってしまう人もいる現状の中でも、仙台への地元愛あふれる人も大勢いて、それぞれの場所でできることを実践することが、東北の中での仙台をよりよくしていくことにつながっていくというお話がありました。

仙台での地域づくりについて

前段の話を踏まえて、それぞれの視点から見た仙台での地域づくりについて話し合いました。

初めに飯島氏から、小規模多機能自治という地域運営組織が最近脚光を浴びており、経済活動も含めて、活動の持続可能性を担保していくというものが展開されている。それに対して仙台のような大都市ではコミュニティの意識が希薄であったり、そこまで切羽詰まってないということで主体的に行動していくことは難しいのではないか、その面で仙台市の強みをどう生かしていくのか、どう地域愛をもって活動していくのかをそれぞれの取り組みからヒントをもらえればとのお話がありました。

それに対して太田氏から、地域愛を深めるためには歴史や自然だったりその地域を知ることが必要ではないか、さらにはその地域の人を知ることも必要だ。そうした知ってもらう活動を通じて、地域は楽しいんだよというのをいろいろな形で伝えていくことで、就職して出ていった人が戻ってこられる環境を作ることも大事なのかなと感じていますとのお話がありました。

木須氏からは、政令指定都市に移行後、区役所は地域の方により近い立場でその声を聞ける位置づけとなった。市全体では、市長への手紙など広聴制度も整えているが、地域づくりを進めるにはそれで十分と満足せずに、さらに行政の目線を低くして、声にならない小さなつぶやきをも拾えるような仕組みづくりを考える必要もあるのではないかとの意見が出されました。

佐藤氏からは、まちづくりというのは行政だけが行うものではなく、民間の事業者、NPO、市民など多様な主体が力を合わせてやっていくものだ。そこで市民がどう参画するか、市民主役でどのようにして市民主体、市民自治というのをやっていくかというのがこれからは大事になってくるのではないかとの意見が出されました。

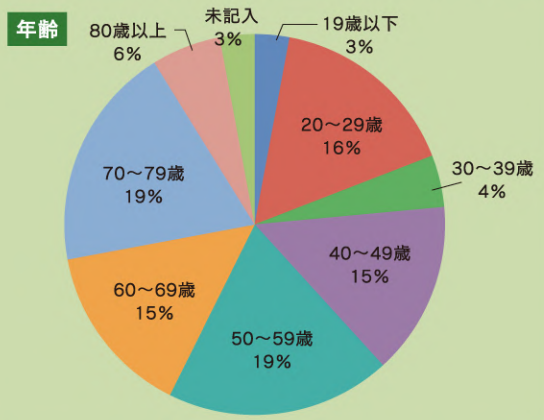
齊藤氏からは、今までの仙台市役所を含めた地方自治体は全体の課題解決をマネジメントする立場にあったが、これからは中央も地方もフラットな考え方で協働で行っていく時代に変化している。仙台市役所も組織としてのあり方を時代の流れに合わせて変化させていく必要があるのではないかとのお話がありました。

会場には市制施行 130 周年、政令指定都市・区制移行 30 周年記念パネルも展示されました。

参加した市民の皆様からのアンケートより

➡今日の講演内容を聴き、もっともっと仙台市をより良い都市にしていきたいと思った。非常に有意義な時間だった。
➡ダム機能を果たせる仙台、仙台を魅力ある都市にするため、いかに地元愛を育むか、その方法を私なりに考えていきたい。
➡仙台市が今後もリーダーシップをとり、東北の発展に尽力して頂くようお願いする。
➡大学生が参加していたことでシンポジウムが大変盛り上がったと思う。次回は、地域づくりやコミュニティ維持の視点から行政と地域が協働できるようなアイディアについて話し合えるといいと思う。
➡世界から見て、これが仙台というアイデンティティある都市を追求してほしいと思う。
➡様々なことを学ぶことができ、参加して良かったと思った。今は大学1年生なので、この学びを今後に活かしていけたらと思う。またこのようなイベントがあったら、是非参加したい。
➡就職時に東京へ出ていくことは残念だが、仙台で学生に失敗やチャレンジを体験させることが、日本や世界の今後の繁栄を支えるならそれもよい。
➡最近NPO活動に興味があり、やりたいことも決まっている。働く場所があっての地域経済だと思う。
➡自分たちがアクションしてみる必要がある。地域の皆さんが楽しみながらやる。コミュニティを大事に生きていきたい。

参加された方々（参加人数：109名、アンケート回答68名）



仙台市から一言

今回のシンポジウムにお越しいただいた皆様からのアンケートでは、「様々な経験をされた方の貴重な話を聞けた」、「多様性を感じるパネリストの構成で良かった」などのご意見をいただきました。一方で、「もっと話を聞きたかったのに時間が足りなかった」というご指摘もいただくなど、反省点もありました。

「今回の議論の内容は、総合計画へ活かされるのか」とのご質問もいただきましたが、今回のパネリストの議論の内容や、皆様からいただいたアンケートのご意見、ご感想等を参考にし、新たな総合計画はもちろん、仙台の行政運営のあり方の検討、そして大都市であるからこその地域づくりへの取組みなどへ活かしてまいります。